

上賀茂試験地の鳥類相

二 村 一 男

はじめに

著者は、すでに京都府北部の原生林といわれる芦生演習林、北海道東部の冷温帯林（京大北海道演習林）、山口県の徳山市街地北部に隣接し、照葉樹林帯上部の徳山試験地の鳥類相を検討した。上賀茂試験地は、徳山試験地と同様照葉樹林帯上部に位置するが、京都市という都会に隣接した場所として鳥類の構成状態の特徴を調べる必要があると思われる。1984年から1990年までの6年間にわたり鳥類相の調査を行い、試験地内および隣接地で30科74種が確認できた。

京都大学農学部附属演習林上賀茂試験地は、京都市街地の北部にある低山の里山的な森林である。昭和45年6月10日に京都市の風致地区の指定をうけ50.27ヘクタールは第一種風致地区、市街化調整区域になっている。1949年の開設以来、林内には外国産マツ類を中心にした実験林やタケ・ササ類見本園などがある。市街地に近いため、ここを訪れる人々は多く一般の見学者をあわせると年間約1,700人にもおよぶ利用者がある。

ここ数年、試験地内や周辺部の環境の変化が著しく、そのひとつに1965年頃に出はじめたマツ枯れの被害である。その以後ますます被害は増大し、岡本ら¹⁾によれば、1984年度までのマツ枯れは100m²以下であったが、1988年には300m²にもおよぶようになった。このことは上賀茂試験地の主林木の天然生のアカマツが毎年減少している状況である。また、東側の隣接地では宅地開発がめざましく試験地周辺にせまり、マツ林や水田、畑などが宅地化されて鳥類の生息地が減少している。このように試験地の森林や隣接する周辺部の環境変化は鳥類の生息にも大いに影響を与え種類数や個体数に大きく変化をもたらしていると推測され、この時点で鳥類相を調べておく必要があると思われた。

上賀茂試験地周辺の鳥類相については、本試験地から南東約1.7kmの所にある貴重な植物群落で有名な国の天然記念物指定（深泥池生物群集）の「深泥池」を中心に1974年から1983年の10年間にわたり鳥類相の調査をされた日本野鳥の会京都支部の林 昭一氏²⁾は134種の鳥類を確認している。上賀茂試験地の鳥類に関しては、まだ調査がされていない。鳥類相を記録調査しておくことは、試験地の森林施業や試験研究及びマツ枯れによる林相の変化が鳥類相におよぼす影響などの面からも大いに参考になるとと思われる。

報告に際して、鳥類の情報などに協力していただいた上賀茂試験地主任の古野東洲助教授をはじめ職員のみなさん、演習林の石原寛一氏、日本野鳥の会京都支部の松村淳一氏、さらに常々御教示やとりまとめに協力いただいた京都大学演習林の大島誠一助教授に厚くお礼申し上げる。

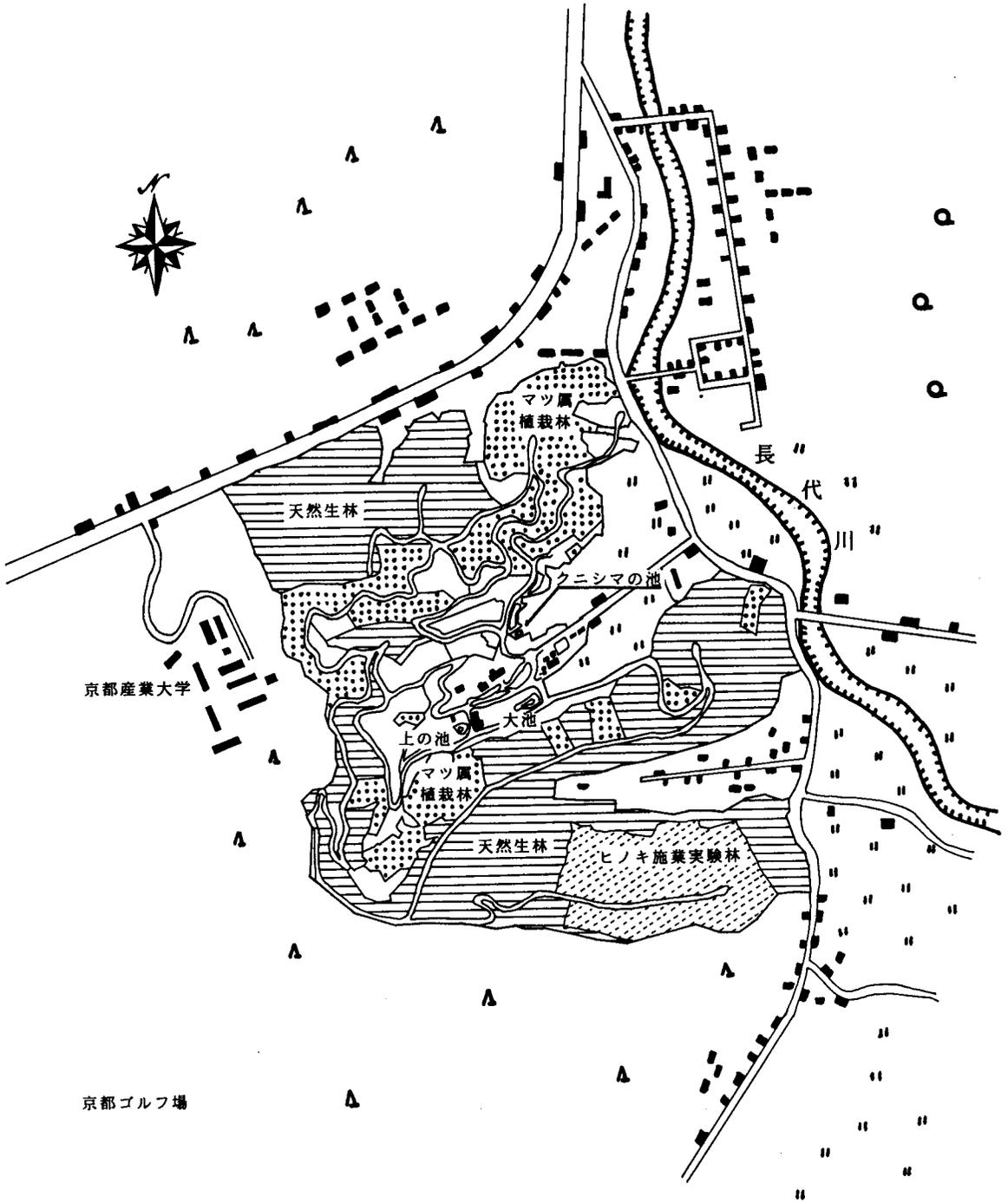


図-2 上賀茂試験地林内図および周辺図

調査地および調査方法

上賀茂試験地は京都盆地の北部にあり、京都駅より北東約17kmに位置する。森林面積は50.8ヘクタールである(図2)。標高は、100mから225mで東西と南北にのびる尾根が境界で、その東斜面と南斜面、北斜面からなり、起伏はあるものの谷川と称するせせらぎはない。試験地の南側と北側には天然生二次林が続き、東側の低地は都市近郊の住宅地として利用されているが、低地のさらに東方は二次林が続いている。西側の低地は上賀茂神社、ゴルフ場、産業大学などの緑地が続くが狭く、さらに西側は京都市の市街地が広がっている。

年平均気温は15.0℃、年降水量は1,659mmで例年10cm程度の積雪が1～2回みられる。利用区分によれば、天然生二次林が約31haで全面積の60%をしめ、人工林が約16ha、構内や苗畑などが約4haである。試験地の中心地域の構内(約3.5ha)は公園風に整備され、周辺には実験林や見本林、苗畑および事務所、温室などの施設がある。天然生林の上層木はアカマツ、ヒノキで、それらに広葉樹が混交した二次林であるが、生長はよくない。おもな広葉樹は、コナラ、コシアブラ、ソヨゴ、リョウブ、アセビ、ツツジ類などであるが、そのほかに見本林として造成された国内や外国産の針葉樹(主にマツ類)や広葉樹の樹種も多数ある。これらの果実、ほとんど鳥類の餌として好むと思われる。構内には、わずかに山水が流れ込む二つの集水池(約1,121m²)がある。それぞれ「上の池」とそれとつながった「大池」と呼んでいる。ここには水生植物のスイレンなどが生育し、ときどきカモ類、サギ類、カワセミなどが採餌や休息にやってくる。また、隣接地にはかつて灌漑用に使われていた小さな池(クニシマの池・約90m²)があり、ここにもカモ類が休息に飛来する。試験地を取りまく環境は、入口にあたる東部は水田や畑があり、それらが木野の集落に続いている。そのほかはアカマツを主体にした天然生の二次林の民有林に囲まれている。西北部は試験地と同じような林相の国有林でその山裾には、大正15年に創設された大学の旧試験地があり、現在はゴルフ場になり、この池(小池・蟻ヶ池)にもカモ類が飛来し、冬季は絶好の越冬地になっている。

調査方法は、四季を通じ9倍の双眼鏡を使用して生態観察を行った。鳥類目録の配列順序は、日本鳥類目録改訂第5版(日本鳥類学会1974)和名、学名は、小林³⁾によった。観察例の少ないものは、観察年月日を記録し、観察記事をできるだけつけ加えた。

調査結果

上賀茂試験地の鳥類目録

DODICIPEDIFORMES カイツブリ目

PODICEPEDAE カイツブリ科

Podiceps ruficollis poggei (Reichenow) カイツブリ

'86.1.25, '86.2.22, '90.11.17, ゴルフ場の小池。

CICONIIFORMES コウノトリ目

ARDEIDAE サギ科

Nycticorax nycticorax nycticorax (Linnaeus) ゴイサギ

'86.10.22, 木野の水田近くの竹藪で1羽。'90.1.7, 上の池で成鳥1羽。'90.6.16, 夜間に鳴き声を聞く。

Bubulcus ibis coromandus (Boddaert) アマサギ

'88.5.1, 木野の水田で10羽がコサギ2羽と行動していた。

Ardea cinerea jouyi Clark アオサギ

'85.9.19, 大池で1羽(岡本), '88.9.15, 大池で1羽(岡本)。

Egretta garzetta garzetta (Linnaeus) コサギ

ほぼ周年1~2羽, 試験地付近の水田や木野の水田, ゴルフ場の池などで見られる。林内の林縁のマツ林にまれに飛来することもある。

ANSERIFORMES ガンカモ目

ANATIDAE ガンカモ科

Anas platyrhynchos platyrhynchos Linnaeus マガモ

2~6月にかけて♂1羽, または♂♀でクニシマの池, 大池で観察する。'88.11.13, ♂3羽, ♀1羽, '88.12.31, ♂3羽いずれもクニシマの池で。

Anas poecilorhyncha zonorhyncha Swinhoe カルガモ

試験地の二つの池では, 3~6月にかけて1~3羽くらい観察できる。'89.5.21, ♂1羽, ♀1羽と幼鳥1羽(岡本氏)。また秋から冬にかけてゴルフ場の池でも観察できる。

Anas crecca crecca Linnaeus コガモ

冬季にゴルフ場の池でよく見られる。'86.1.25, に25羽, '87.2.7, 20羽, '88.1.16, 40羽, '90.11.17, 長代川で1羽。

Anas penelope Linnaeus ヒドリガモ

冬季にゴルフ場の池に飛来する。'87.2.7, に22羽, '88.1.16, ♂7羽, ♀19羽, 時には芝生で採餌(10羽)することもある。'90.11.17, に15羽。

AALCONIFORMES ワシタカ目

ACCIPITRIDAE ワシタカ科

Milvus migrans lineatus (Gray) トビ

周年生息するが林内の上空を1~2羽飛翔または通過することが多い。

Accipiter gentilis fujiyamae (Swann & Hartert) オオタカ

'86.2.22, に尾根筋で1羽通過。

Butastur indicus (Gmelin) サシバ

'84.4.22, マツ林で1羽, '86.4.20, 1羽通過。

Pernis apivorus japonicus Kuroda ハチクマ

'85.6.9, 林内上空を1羽通過。

GALLIFORMES キジ目

PHASIANIDAE キジ科

Bambusicola thoracica thoracica (Temminck) コジュケイ

春先から初夏にかけて鳴き声を聞くが個体数は少ない。年によってまったく観察できないこともあり, おそらく隣接地に移動するのであろうか。'90.5.27, に構内で1羽観察した。

Phasianus colchicus versicolor Vieillot キジ

林内には二番くらいが周年生息し, 春は4月下旬に鳴き声を聞くようになり繁殖している。12月31日に鳴き声を聞いたこともある。'90.6.17, 親鳥と雛5~6羽を観察した。

Symaticus soemmerringii scintillans (Gould) ヤマドリ

'84.10.27, 林道で♂1羽。'86.1.28, ♂1羽(加藤)。

CHARADRIIFORMES チドリ目

CHARADRIIDAE チドリ科

Microsarcops cinerus (Blyth) ケリ

冬季まれに隣接地の水田に飛来する。'87.12.27, 木野の水田で1羽。'90.1.7, 試験地入口の水田で3羽。

Vanellus vanellus (Linnaeus) タゲリ

'86.1.18, 木野の水田で1羽。

COLUMBIFORMES ハト目

COLUMBIDAE ハト科

Streptopelia orientalis orientalis (Latham) キジバト

周年生息し、単独または2~10羽くらいの群れを観察する。

CUCULIFORMES ホトトギス目

CUCULIDAE ホトトギス科

Cuculus saturatus horsfieldi Moore ツツドリ

'86.5.10, マツ林で鳴き声を聞く。

CAPRIMULGIFORMES ヨタカ目

CAPRIMULGIDAE ヨタカ科

Caprimulgus indicus jotaka Temminck & Schlgel ヨタカ

'90.6.16, および'90.7.7, に1~2羽夜間に鳴き声を聞く。

CORACIIFORMES ブッポウソウ目

ALCEDINIDAE カワセミ科

Alcedo atthis bengalensis Gmelin カワセミ

おもに4月から7月の繁殖期に時々構内の大池に採餌にやってくる。林道ぞいの赤土の切り取り法面にいくつかの古い巣がある。

PICIFORMES キツツキ目

PICIDAE キツツキ科

Picus awokera awokera Temminck アオゲラ

周辺から漂行する個体が、おもに秋から冬にかけて観察できる。'86.2.22, 鳴き声を聞く。'86.10.4, マツ林で♀1羽, '89.3.12, 苗畑付近で♂1羽, '89.11.4, 苗畑付近で♂1羽, ♀1羽。

Dendrocopos major hondoensis (Kuroda) アカゲラ

広葉樹が少ないせいか、これまで1回観察したのみ。'89.3.12, ♂1羽が広葉樹の立枯木で採餌。

Dendrocopos kizuki nippon (Kuroda) コゲラ

林内に周年生息し、個体数も比較的多い。マツ林でよく観察できる。マツ枯れ木で古い営巣木がみつかる。

PASSERIFORMES スズメ目

ALAUDIDAE ヒバリ科

Alauda arvensis japonica Temminck & Schlegel ヒバリ

木野の開けた水田付近に4月から6月にかけてよくさえずる。

HIRUNDINIDAE ツバメ科

Hirundo rustica gutturalis Scopoli ツバメ

4月下旬から7月にかけて1～5羽程度が林内の上空を飛翔するのが観察できる。木野の集落で繁殖している。

H. daurica japonica Temminck & Schlegel コシアカツバメ

秋の渡りの時期の'89.10.12, に木野で10羽観察した。

MOTACILLIDAE セキレイ科

Motacilla cinerea robusta (Brehm) キセキレイ

'86.10.4, 苗畑で2羽, '87.2.7, ゴルフ場の池で1羽, '88.11.13, 入口の道路で1羽, '90.6.17, 構内で1羽。

Motacilla alba lugens Gloger ハクセキレイ

秋から冬にかけて苗畑や長代川, 隣接地の民家付近で数羽観察できる。

Motacilla grandis Sharpe セグロセキレイ

5月から6月にかけてと, 秋にわずかに構内や苗畑で1～2羽の幼鳥と成鳥が観察できる。また, 1月から3月にかけては, わずかにゴルフ場や隣接地の畑で1～2羽くらい観察することもある。

Anthus hodgsoni hodgsoni Richmond ビンズイ

冬鳥として渡来し, 10月から4月にかけてわずかに観察できる。'85.4.27, 林内で地鳴き, '85.10.10, 林内で地鳴き, '86.2.22, ゴルフ場の芝生で2羽採餌, '88.1.16, マツ林で1羽, '88.11.13, マツ林で1羽, '89.1.29, 苗畑で1羽。

PYCNONOTIDAE ヒヨドリ科

Hypsipetes amaurotis amaurotis (Temminck) ヒヨドリ

周年生息し, 個体数も比較的多い。10月から12月にかけて数が多くなり, 1月から3月にかけては少ない。林内のソヨゴ, コシアブラ, アオハダなどの実をよく食べ, ツバキやソメイヨシノの花の蜜をよく吸う。また, ニセアカシアの花を食べることもあった。

LANIIDAE モズ科

Lanius bucephalus bucephalus Temminck & Schlegel モズ

隣接する水田や苗畑付近, 構内などで2～3番くらいが周年生息する。

BOMBYCILLIDAE レンジャク科

Bombycilla japonica (Siebold) ヒレンジャク

'85.4.27, 渡りの途中の8羽がアカマツ林で樹皮をひっくりかえして採餌していた。

TROGLODYTIDAE ミソサザイ科

Troglodytes troglodytes fumigatus Temminck ミソサザイ

'86.12.29, 林道ぞいの法面で1羽が採餌。

TURDINAE ツグミ亜科

Tarsiger cyanurus cyanurus (Pallas) ルリビタキ

冬鳥として渡来し、11月から3月にかけて1～3羽くらいが時々観察できるが、数は少ない。地上や林縁の藪にいることが多い。

Phoenicurus auroeus auroreus (pallas) ジョウビタキ

11月から2月にかけて構内や苗畑付近で1～2羽が観察できる。比較的♂が多い。

Zoothera dama aurea (Holandre) トラツグミ

昼間姿を観察することはまれだが、'89.1.18, に地上で1羽観察した。これまで標本館や事務所の窓ガラスに2羽が衝突死したり、標本館の中に入り込み保護し放鳥したことがある。'90.6.16, の夜間に鳴き声を確認しているのですおそらく個体数は少ないが周年生息していると思われる。

Turdus chrysolaus Temminck アカハラ

1976年10月17日の京都野鳥の会例会⁴⁾(深泥ヶ池～岩倉の探鳥会)で観察された。渡りの途中と思われる。

Turdus pallidus Gmelin シロハラ

冬鳥としてわずかに渡来するが、林床に単独でいることが多いので直接観察することは少ない。4月中旬頃まで残留したことがある。

Turdus naumanni eunomus Temminck ツグミ

冬鳥の代表として親しまれているが、林内では鳴き声や通過個体を観察する程度だが、春の渡りの時期には隣接する水田や構内の芝生で採餌する2～6羽くらいの小群を見ることがある。

SYLVIINAE ウグイス亜科

Urosphena squameiceps (Swinhoe) ヤブサメ

藪の中を漂行するので姿を見ることはほとんどできない。春の渡りの途中と思われる個体がわずかに観察できることがある。

Cettia diphone cantans (Temminck & Schlegel) ウグイス

周年生息するが、多くない。初鳴きは3月12日頃である。

Phylloscopus borealis xanthodryas (Swinhoe) メボソムシクイ

'84.9.22, マツ林で1羽, '86.5.10, 林内で鳴き声1羽, 渡りの途中と思われる。

Phylloscopus tenellipes Swinhoe エゾムシクイ

'84.5.5, '85.5.12, '88.5.1, いずれもマツ林で鳴き声。渡りの途中と思われる。

Phylloscopus occipitalis coronatus (Temminck & Schlegel) センダイムシクイ

'86.5.10, 林内の中腹付近で鳴き声。渡りの途中と思われる。

Regulus regulus japonensis Blakiston キクイタダキ

冬鳥として渡来するが、まれに観察することがある。'86.1.18, マツ林でエナガ, メジロと混群する♂♀10羽, '86.1.25, マツ林で2羽, '88.2.13, アカマツ林の樹冠で♀3羽, '88.12.31, マツと広葉樹の天然林でシジュウカラ, メジロと混群♀1羽。

MUSCICAPINAE ヒタキ亜科

Muscicapa narcissins narcissina Temminck キビタキ

'88.5.1, 天然生ヒノキ林の下層木で♂1羽, 渡りの途中と思われる。

Muscicapa cyanamelana cyanamelana Temminck オオルリ

'88.5.1, マツ林でよくさえずついていた, '89.5.5, ♂1羽, '90.6.17, 成鳥♂1羽と幼鳥1羽を観察, 渡りの途中と思われる。

Muscicapa sibirica sibirica Gmelin サメビタキ

'84.9.22, 広葉樹林で2羽地鳴き。渡りの途中と思われる。

Muscicapa latirostris Raffles コサメビタキ

'85.6.9, スギ林で3羽地鳴き, '87.4.26, 広葉樹の樹冠で1羽, 渡りの途中と思われる。

AEGITHALIDAE エナガ科

Aegithalos caudatus trivirgatus (Temminck & Schlegel) エナガ

周年生息し, 個体数も比較的多い。マツ林を好み, 2~10羽くらいの小群で漂行する。1月から2月にかけての冬にはメジロ, ヤマガラ, シジュウカラ, キクイタダキなどと20~30羽くらいの混群になることが多い。'85.5.12, メタセコイア林で幼鳥2羽を観察し, また, '86.4.20, マツ林で巣材と思われる羽毛をくわえていた個体を観察したので繁殖していると思われる。

PARIDAE シジュウカラ科

Parus ater insularis Hellmayr ヒガラ

冬季に少数が観察できる。'87.2.7, 2羽がアカマツの実を食べていた。エナガ, シジュウカラ, ヤマガラと混群, '88.2.13, 5羽が樹冠で採餌, ヤマガラ, シジュウカラと混群, '88.12.31, 1羽がアカマツの実を食べていた。

Parus varius varius Temminck & Schlegel ヤマガラ

周年生息するが, 数は少なく, 1~2羽を観察することが多く, 2月中旬頃にさえずりだす。林内のアカマツ, チョウセンゴヨウ, コノデカシワなどの実を好んで食べる。

Parus major minor Temminck & Schlegel シジュウカラ

周年生息し, エナガについて比較的良好に観察できる。2月下旬頃さえずりだし, エナガとよく混群となる。アカマツの実をよく食べ, 冬季は地上で落葉などをひっくりかえして採餌する。'90.6.17, 構内の車庫で繁殖した。

ZOSTEROPIDAE メジロ科

Zosterops japonica japonica Temminck & Schlegel メジロ

周年生息し, 比較的良好に観察できる。2~3羽で観察することが多く, 冬季には, 10羽くらいの小群となり, ヤマガラ, エナガ, シジュウカラ, キクイタダキなどと混群になることもある。'89.6.3, 5~6羽でザイフリボクの実を食べていた。冬季には, コシアブラの実を食べたり, ヒサカキの花の蜜を求めて集まることもある。また, アカマツの樹皮をひっくりかえして採餌することもあった。

EMBERIZIDAE ホオジロ科

Emberiza cioides ciopsis Bonnaparte ホオジロ

周年生息するが, 数は多くない。林内の開けた構内や苗畑付近, 林縁でよく見かける。4月はじめ頃にヒノキやマツのソングポストでよくさえずる。

Emberiza rustica latifascia Portenko カシラダカ

'89.3.12, サクラの木で3羽観察, 渡りの途中と思われる。'90.11.17, 苗畑で3羽。

Emberiza elegans elegans Temminck ミヤマホオジロ

冬鳥として渡来し, 11月中旬から3月にかけて観察するが, 数は少ない。1~3羽のが多く, 地上で採餌することが多い。

Emberiza spodocephala personata Temminck アオジ

冬鳥として11月はじめから4月にかけて1~3羽くらい観察するが, 数は少ない。構内の芝生, 林縁の藪に多い。

FRINGILLIDAE アトリ科

Fringilla montifringilla Linnaeus アトリ

冬鳥として渡来するが、まれに観察することがある。'89.1.29, サクラの木で休息する50羽の群れを観察, '89.3.12, 渡りの途中の80羽以上の群れが林床のタイワンフウの落葉をひっくり返して採餌していた。この時に落葉をひっくりかえす音が異様なほど聞こえてきた。

Carduelis sinica minor (Temminck & Schlegel) カワラヒワ

周年生息するが数は少ない。3月下旬頃さえずりだし、通常1～5羽くらいで林内を通過するのを観察する。

Carduelis spinus (Linnaeus) マヒワ

冬鳥として不定期に渡来し、30～100羽くらい観察することもある。'86.1.18, 60羽くらいがタイワンフウの実を採餌, '86.12.29, 約70羽が通過, '87.2.7, 30羽くらいがタイワンフウの実を採餌, '89.1.29, 100羽くらいの群れがスギの実を採餌していた。

Uragus sibiricus sanguinolentus (Temminck & Schlegel) ベニマシコ

冬季ごくまれに観察することがある。'86.1.25, '87.3.1, いずれも鳴き声, '88.2.13, ♂2羽, ♀2羽, 雑草の実を食べていた。

Pyrrhula pyrrhula griseiventris Lafresnaye ウソ

'86.12.29, ♂1羽がカナメモチの実を食べていた。'87.3.1, 鳴き声(松村)。

Eophona personata personata (Temminck & Schlegel) イカル

周年生息するが冬季には少なくなり、2月中旬から6月にかけてよくさえずる。通常1～5羽くらいで飛来することが多く、時には20～50羽の群れで地上で採餌することもある。4月上旬にサクラの新芽や花を食べていた。

PLOCEIDAE ハタオリドリ科

Passer montanus saturatus Stejneger スズメ

隣接地の人家や水田付近、苗畑付近に周年生息する。たいてい2～10羽くらいであるが9月頃より50羽くらいの群れになり、多いときには70羽くらいの群れを観察することもある。

STURNIDAE ムクドリ科

Sturnus cineraceus Temminck ムクドリ

3月中旬より隣接地の水田で4～5羽くらい観察するようになり、6月中旬から7月にかけて群れの数が増し、幼鳥と成鳥からなる10～60羽くらいの群れを観察することもある。水田や構内の芝生で採餌し、電線に並んで休息する。

CORVIDAE カラス科

Garrulus glandarius japonicus Temminck & Schlegel カケス

繁殖期(6～9月)を除いて生息するが数は少ない。通常1～3羽くらいで行動している。'84.4.22, マツ林で4羽がトビの鳴きまねをしていた。'85.10.10, コナラやアベマキの実をくわえて飛ぶ個体を観察した。

Covus corone orientalis Eversmann ハシボソガラス

主に隣接地の水田や畑付近で周年生息し、時々林内のマツ林でも見られる。古野氏は、1981年6月28日から7月2日までの5日間にわたり、モミジバフウ林で食葉性害虫のクスサンの営繭し始めた幼虫を補食する約15羽の個体を観察している。

Corvus macrorhynchus japonensis Bonaparte ハシブトガラス

ハシボソガラスより少ないが、時々林内で1～3羽くらい見ることがある。木野付近の集落では比較的よく見るが、数は少ない。

考 察

上賀茂試験地および隣接地で、27科74種の鳥類が記録できた。渡り鳥として大別してみると、留鳥は約38%、冬鳥は約28%、旅鳥は約27%、夏鳥は約7%となった。このような鳥類相と森林および地形との関係についてみると、上賀茂試験地が天然生のアカマツやヒノキが主体の60%を占める単純な二次林に加えて林内に点在する広葉樹の見本林と苗畑や水辺（池）などがあることによって比較的变化のある環境といえる。また、周辺の地形は、木野の集落付近に広がる水田や畑が試験地付近まで続き、山地は、市原から二の瀬、貴船、鞍馬などの北山へと続いている。このような位置にある上賀茂試験地の森林と鳥類との関わりについてみると、特に約38%の留鳥、約28%の冬鳥、約27%の旅鳥などがそれぞれ生息し、観察できたことはこの森林が鳥類にとって生息・越冬・繁殖・渡りの途中の休息地として重要な役割を果たしているといえよう。

隣接地の深泥池で林 昭一氏は10年間の鳥類相の調査で134種を記録したが、上賀茂試験地の鳥類相と比較しての深泥池の鳥類が格段に多い原因は、環境の違いによるためであろう。低山帯の鳥類は双方とも共通種が生息しているが、深泥池は開水域と草原状の浮島などの環境に水辺の鳥、草原性の鳥などが多種にわたり飛来することにある。

一般的に鳥類は森林に関わるさまざまな害獣や害虫の天敵として重要な役割を果たしている。上賀茂試験地でも調査中にシジュウカラやヤマガラ、エナガなどの食虫活動を観察している。害虫の大発生に鳥類がその生息数のコントロールに大いに役立っている。これらの鳥類で樹洞を利用して繁殖するシジュウカラやヤマガラなどの安定した生息数を増加するためには、営巣場所が重要になってくる。上賀茂のように比較的若齢の人工林の針葉樹が多い区域では、天然の樹洞はほとんどない。そこで巣箱を架設することによって繁殖のための補助作業が必要になろう。著者⁵⁾はこれまでに芦生演習林や徳山試験地で巣箱を架設したところヤマガラ、シジュウカラが利用して繁殖し、その利用率は50%以上であった。古野⁶⁾は、モミジバフウの実験林で大発生した食葉性害虫のクスサンの営巣し始めた幼虫を5日間にわたり補食する約15羽のハシボソガラスの小群を観察した。この補食行動によってクスサンの大発生が終息し、以後、恒常発生にもどつたと報告している。ハシボソガラスは主に隣接地の水田や畑付近に周年生息し、林内のマツ林でも時々見られるが、普通は3～4羽くらい観察するが古野の報告のように一地域に約15羽もの群れが集中したのは珍しいと思われる。上田⁷⁾は「群れの行動生態学」の中で“ねぐらを利用する個体間で鳥類はエサの情報交換をする”と述べている。おそらく集団ねぐらの習性のあるハシボソガラスが情報交換によって大発生したクスサンに集中して飛来補食したものであろう。

マツ枯れと鳥類の関係で由井⁸⁾は媒介者のマツノマダラカミキリの天敵はキツツキ類であると述べ、さらにキツツキ類が数多く生息しておれば、本病の拡大速度を遅くすることが可能であったとも述べている。キツツキ類の中でもアカゲラがマツノマダラカミキリの材内幼虫を強力に補食するといわれている。マツ枯れ被害地の上賀茂にはアカゲラは周年生息していないが、食虫性のコゲラは比較的多く生息し、古い営巣木が見つかるので繁殖もしていると思われる。ちなみにコゲラはアカマツの小径木の立枯木を営巣木として利用するので、その補助作業として、マツ枯れの小径木を立枯木のまま薬剤散布して営巣用の保残木とすることはできないものであろうか。今後、マツ枯れによって変化する植生と鳥類相の種構成、周辺の住宅地化と個体数の遷移などを追跡調査することが重要であろう。

引用文献

- 1) 岡本憲和・渡辺政俊・中井勇・古野東洲：上賀茂試験地におけるマツ枯れについて－発生から1988年までの被害の経緯－. 京大演集報. 20. 26～40, 1990
- 2) 林 昭一：深泥池の最近10年間の見聞鳥. 日本野鳥の会京都支部そんぐぼすと. 12・13. 1～12,1985
- 3) 小林桂助：原色日本鳥類図鑑. 保育社. 大阪. pp284,1956
- 4) 京都野鳥の会：10月第二次例会. 三光鳥. 24. 35～36,1977
- 5) 二村一男：芦生演習林の鳥類相の季節変化. 京大演集報. 20. 1～16,1989
- 6) 古野東洲：モミジバフウ林におけるクスサンの大発生について. 98回日林論. 491～492,1987
- 7) 上田恵介：鳥はなぜ集まる？－群れの行動生態学－. 東京化学同人. 東京. pp201,1990
- 8) 由井正敏：森に棲む野鳥の生態学. 創文. 東京. pp237,1988